

小田原熱海間に、軽便鉄道敷設の工事が始まったのは、良平の八つの年だった。良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行った。工事を——といったところが、ただトロッコで土を運搬する——それが面白さに見に行ったのである。

トロッコの上には土工が二人、土を積んだ後ろにたたずんでいる。トロッコは山を下るのだから、人手を借りずに走って来る。あおるように車台が動いたり、土工のはんてんの裾がひらついたり、細い線路がしなったり——良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたいと思う事がある。せめては一度でも土工と一緒に、トロッコへ乗りたいと思う事もある。トロッコは村外れの平地へ来ると、自然とそこに止まってしまふ。と同時に土工たちは、身軽にトロッコを飛び降りるが早いのか、その線路の終点へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し押し、もと来た山の方へ登り始める。良平はその時乗れないまでも、押す事さえ出来たらと思うのである。

ある夕方、——それは二月の初旬だった。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村外れへ行った。トロッコは泥だらけになったまま、薄明るの中に並んでいる。が、その外はどこを見ても、土工たちの姿は見えなかった。三人の子供は恐る恐る、一番端にあるトロッコを押しした。トロッコは三人の力が揃うと、突然ごろりと車輪をまわした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかった。ごろり、ごろり、——トロッコはそう云う音と共に、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登って行った。

その内にかれこれ十間程来ると、線路の勾配が急になり出した。トロッコも三人の力では、いくら押ししても動かなくなった。どうかすれば車と一緒に、押し戻されそうにもなる事がある。良平はもう好いと思ったから、年下の二人に合図をした。

「さあ、乗ろう！」

彼等は一度に手をはなすと、トロッコの上へ飛び乗った。トロッコは最初おもむろに、それから見る見る勢いよく、一息に線路を下り出した。その途端につき当りの風景は、たちまち両側へ分かれるように、ずんずん目の前へ展開して来る。顔に当る薄暮の風、足の下に躍るトロッコの動揺、——良平は殆ど有頂天になった。

しかしトロッコは二、三分の後のち、もうもとの終点に止まっていた。

「さあ、もう一度押しじゃあ」

良平は年下の二人と一緒に、又トロッコを押し上げにかかった。が、まだ車輪も動かない内に、突然彼等の後ろには、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞え出したと思うと、急にこう云う怒鳴り声に変わった。

「この野郎！ 誰に断わってトロに触った？」

其処には古い印ばんでんに、季節外れの麦藁帽をかぶった、背の高い土工が佇んでいる。——そう云う姿が目にはいった時、良平は年下の二人と一緒に、もう五、六間逃げ出していた。——それきり良平は使の帰りに、人気のない工事場のトロッコを見ても、二度と乗って見ようと思った事はない。唯その時の土工の姿は、今でも良平の頭の何処かに、はっきりした記憶を残している。薄明りの中にほのめい

た、小さい黄色の麦藁帽、――しかしその記憶さえも、としごとに色彩は薄れるらしい。

その後十日余りたつてから、良平は又たった一人、ひる過ぎの工事に佇みながら、トロッコの来るのを眺めていた。すると土を積んだトロッコの外に、枕木を積んだトロッコが一りよう、これは本線になる筈の、太い線路を登って来た。このトロッコを押しているのは、二人とも若い男だった。良平は彼等を見た時から、何だか親しみ易いような気がした。「この人たちならば叱られない」――彼はそう思いながら、トロッコの側へ駆けて行った。

「おじさん。押してやろうか？」

その中の一人、――縞のシャツを着ている男は、うつむきにトロッコを押したまま、思った通り快い返事をした。

「おお、押してくよう」

良平は二人の間にはいると、力一杯押し始めた。

「われは、なかなか力があるな」

他の一人、――耳に巻煙草を挟んだ男も、こう良平を褒めてくれた。

その内に線路の勾配は、だんだん楽になり始めた。「もう押さなくとも好い」――良平は今にも云われるかと内心気がかりでならなかった。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり、黙黙と車を押し続けていた。良平はどうとうこらえ切れずに、おずおずこんな事を尋ねて見た。

「いつまでも押していい？」

「いいとも」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思った。

五、六町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。其処には両側の蜜柑畑に、黄色い実がいくつも日を受けている。

「登りみちの方がいい、いつまでも押させてくれるから」――良平はそんな事を考えながら、全身でトロッコを押すようにした。

蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになった。縞のシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ」と云った。良平はすぐに飛び乗った。トロッコは三人が乗り移ると同時に、蜜柑畑のおいをあおりながら、ひたすべりに線路を走り出した。「押すよりも乗る方がずっといい」――良平は羽織に風をはらませながら、当り前の事を考えた。「行きに押す所が多ければ、帰りに又乗る所が多い」――それもまた考えたりした。

竹藪のある所へ来ると、トロッコは静かに走るのを止やめた。三人は又前のように、重いトロッコを押し始めた。竹藪は何時か雑木林になった。つまさき上りのところどころには、赤錆の線路も見えない程、落葉のたまっている場所もあった。その路をやっと登り切ったら、今度は高い崖の向うに、広広と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、余り遠く来過ぎた事が、急にはっきりと感じられた。

三人は又トロッコへ乗った。車は海を右にしなから、雑木の枝の下を走って行った。しかし良平はさっきのように、面白い気もちにはなれなかった。「もう帰ってくればいい」――彼はそうも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼等も帰れない事は、もちろん彼にもわかり切っていた。

その次に車の止まったのは、切り崩した山を背負っている、藁屋根の茶店の前だった。二人の土工はその店へはいると、乳のみ児をおぶったかみさんを相手に、ゆうゆうと茶などを飲み始めた。良平はひとりいらしなから、トロッコのまわりをまわって見た。トロッコには頑丈な車台の板に、跳ねかえった泥が乾いていた。

しばらくの後茶店を出て来しなに、巻煙草を耳に挟んだ男は、(その時はもう挟んでいなかったが)トロッコの側にいる良平に新聞紙に包んだ駄菓子をくれた。良平は冷淡に「ありがとう」と云った。が、すぐに冷淡にしては、相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子は新聞紙にあつたらしい、石油の匂いがしみついていた。

三人はトロッコを押しながらゆるい傾斜を登って行った。良平は車に手をかけていても、心は外の事を考えていた。

その坂を向うへおり切ると、又同じような茶店があつた。土工たちがその中へはいった後、良平はトロッコに腰をかけながら、帰る事ばかり気にしていた。茶店の前には花のさいた梅に、西日の光が消えかかっている。「もう日が暮れる」——彼はそう考えると、ぼんやり腰かけてもいられなかつた。トロッコの車輪をけて見たり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押して見たり、——そんな事に気もちを紛らせていた。

ところが土工たちは出て来ると、車の上の枕木に手をかけながら、無造作に彼にこう云つた。

「われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」

「あんまり帰りが遅くなるとわれの家でも心配するぞら」

良平は一瞬間あつけにとられた。もうかれこれ暗くなる事、去年の暮母と岩村まで来たが、今日のみちはその三、四倍ある事、それを今からたつた一人、歩いて帰らなければならない事、——そう云う事が一時にわかつたのである。良平は殆ど泣きそうになつた。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いている場合ではないと思つた。彼は若い二人の土工に、取つて附けたようなおじぎをすると、どんどん線路伝いに走り出した。

良平はしばらく無我夢中に線路の側を走り続けた。その内にふところの菓子包みが、邪魔になる事に気がついたから、それをみちばたへほり出すついでに、板草履も其処へ脱ぎ捨ててしまった。すると薄い足袋の裏へじかに小石が食いこんだが、足だけは遙かに軽くなつた。彼は左に海を感じながら、急なさかみちを駈け登つた。時時涙がこみ上げて来ると、自然に顔がゆがんで来る。——それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴つた。

竹藪の側を駈け抜けると、夕焼けのした日金山の空も、もうほてりが消えかかつていた。良平は、いよいよ気が気でなかつた。ゆきとかえりと変るせいか、景色の違うのも不安だつた。すると今度は着物までも、汗の濡れ通つたのが気になつたから、やはり必死に駈け続けたなり、羽織をみちばたへ脱いで捨てた。

蜜柑畑へ来る頃には、あたりは暗くなる一方だつた。「命さえ助かれば——」良平はそう思ひながら、すべつてもつまずいても走つて行った。

やつと遠い夕闇の中に、村外れの工事場が見えた時、良平は一思いに泣きたくなつた。しかしその時もべそはかいたが、とうとう泣かずに駈け続けた。

彼の村へはいつて見ると、もう両側の家家には、電燈の光がさし合つていた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯気の立つのが、彼自身にもはっきりわかつた。井戸端に水を汲くんでいる女衆や、畑から帰つて来る男衆は、良平が喘ぎ喘ぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと声をかけた。が、彼は無言のまま、雑貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼の家の門口へ駈けこんだ時、良平はとうとう大声に、わつと泣き出さずにはいられなかつた。その泣き声は彼の周囲へ、一時に父や母を集まらせた。ことに母は何とか云いながら、良平の体を抱えるようにした。が、良平は手足をものがきながら、すすり上げすすり上げ泣き続けた。その声が余り激しかったせいか、近所の女衆も三、四人、薄暗い門口へ集つて来た。父母は勿論その人たちは、口口に彼の泣

く訳を尋ねた。しかし彼は何と云われても泣き立てるより外に仕方がなかった。あの遠い路を駆け通して来た、今までの心細さをふり返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない気もちに迫られながら、
……………

良平は二十六の年、妻子と一緒に東京へ出て来た。今では或雑誌社の二階に、校正の朱筆を握っている。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思い出す事がある。全然何の理由もないのに？——塵労に疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すじ断続している。

底本：「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社

1968 (昭和43)年 11月15日発行

1984 (昭和59)年 12月25日 38刷改版

1989 (平成元)年 5月30日 46刷